

日本語教育実践研究（7）

—実践を通して学んだこと—

張 芄蕾・陳 娟・楊 魁魁・陸 麗青

【キーワード】：漢字教育・漢字圏と非漢字圏・音読みと訓読み・同音異義語
・四字熟語

はじめに

本レポートは、2005年春学期に実施された日本語教育実践研究（7）（担当 鈴木義昭教授）の実習生として日本語研究教育センター設置授業「日本語科目」、「漢字指導C（7-8）クラス」に参加して、実践時に得られた経験に基づき、実習の概要、感想、さらにはわれわれの提言等を書いたものである（各人の形式に拠ったものであるため、若干の不統一は、これを諒されよ）。実習の構成メンバーは、四名とも中国語母語話者の学生である。

まず、われわれが中国で日本語教育を受けた時の事情の紹介を行っておきたい。中国のほとんどの大学では、「日本語の漢字教育」が行われていない。残念ながら、教師たちは授業の重点を音声・語彙・文法等に置き、漢字教育にはさほど意を払っていないかに見える。われわれは、「漢字指導」というものを受けたことがないのである。中国での日本語教育においては、漢字指導は必要ないと思われるのではないだろうか。漢字というものは、漢字の故郷である中国人学習者にとって、必要ないものと理解されていると言えよう。今学期、この実践教育の授業に出席して、中国語母語話者に対する、漢字教育の重要性を改めて認識した次第である。

実習授業の分析

学習者の状況並びに指導項目

学習者の構成では、33名のうち非漢字系学生1に対して、漢字系学生3の比率で、比較的漢字系学生の多いクラスであった。漢字系学生の出身国は、韓国（15名）・中国（台湾を含む、10名）で、非漢字系学生の出身国は、ロシア（2名）・イタリア（2名）・スロバキア（1名）・リトアニア（1名）・フランス（1名）・カザフスタン（1名）等であった。

今学期の実践教育では、実習生が全部で四人、一人2回の教壇実習を行うことにな

った（開講後、暫くして日本人実習生が加わる）。このクラスでは、授業の前半1時間を担当教員が行い、後半30分を学生が担当するという形式を執った。うち、前半の1時間は、さらに30分、30分に分かれ、小テストとその回答に当てられた。小テストは、前の時間に配布された漢字表を自宅で練習したものに関する試験であった。漢字表は、常用漢字表のうち、日本語能力試験一級の漢字を大きく音読みしかないもの、訓読みしかないもの、音訓両読みの3項目に分け、さらにそれをアイウエオ順に並べ、例文を付けたものであった。各時間に配布されるペーパーは鈴木教授が作成したもので、例文は先生が作ったものだそうであるが、われわれの眼にもやや難解であり、新聞の文章程度に収めるべきではなかったかと思われる。以後、われわれの実習を個人ごとに挙げることにする（提出順はアイウエオ順とする）。

張芄菴：

筆者は以前、中国の大学で日本語の授業を担当していたことがある。ほとんどの大学では、「日本語の漢字指導」という授業が設置されていないのが実情である。中国人学習者にとって日本語の漢字は、学習項目というよりは、むしろ学習者の杖であると考えられている。それは、学習者のみならず、日本語教育学界にも広く認められた考え方である。多くの中国人日本語教師は、授業の重点を音声・語彙・文法に置き、漢字教育を軽視しているのである。上記のような反省に立って、二回の教壇実習を行った。以下に、その概要を述べる。

漢字仮名混じりで表記される日本語の語彙において、どこまでが漢字で、どこから送り仮名を付けるかは非漢字系学習者ばかりでなく、漢字系学習者をも悩ませる問題の一つである。かつて、筆者は「一つ一つ覚えるしかない」と考えていた。しかし、今回の実践では、「送り仮名の付け方」を取り上げ、「常用漢字表」などの外、いろいろな資料を調べてみた。基本的には、動詞・形容詞のような活用のある語は、活用語尾を送るという原則になっている。にもかかわらず、原則以外に、「例外」と「許容」とがあり、学習者を悩ませている。そのため、一回目の教壇実習時の練習問題は、「例外」と「許容」とに重点を置いて、問題を作成した。

また、二回目は、「熟語の読み方」を取り上げた。漢字はどういう場合に「音」で読み、どういった場合に「訓」で読むのか、実に分かりにくい。そのため、教壇実習では、まず熟語の基本的な読み方、

- ① 前後とも音読みをするもの
- ② 前後とも訓読みをするもの
- ③ 重箱読み
- ④ 湯桶読み

を中心に進めた。「熟語は音読みと訓読みとを混用しない」ということを学習者に理解

させるとともに、「重箱読み」、「湯桶読み」が語構成的にも特殊な読み方であることを強調しておいた。

反省としては、まず、筆者の担当した授業が面白みに欠けていた点を挙げておかななくてはならない。それはともかくとして、中国の日本語教育では、授業の形式よりも内容面が重視される傾向にある。そのため、筆者も学習内容を如何にして理解させるかという点については工夫したが、如何にして楽しく学習するかについては、あまり重視しなかったきらいがある。世界各国から来た学習者は、どんなに大切な知識であっても、バラエティーの富んだものでなくては、学習者の意欲がそがれるということに気が付いた。今後は、こうした実践の経験を生かし、面白さに溢れた授業を目指したいと痛感した。

いずれにせよ、今回の教壇実習は、漢字教育を再認識するよい機会であった。授業の準備をし、資料を調べていくうちに、漢字教育は独立したのではなく、音声・語彙などとも絡み合ったものだということがよく分かった。そして、漢字教育は非漢字系学生のみならず、漢字系の学生にも重要なものであることを再認識した。特に、中国人学習者を対象とする「漢字教育」の可能性及び重要性も再認識したという次第である。

参考文献：

- アルク日本語出版編集部（1994）『漢字ハンドブック』アルク
- 佐藤喜代治（1988）『漢字教育』明治書院
- 武部良明（1988）『漢字の教え方』アルク
- 森田良行（1991）『語彙とその意味』

陳娟：

筆者は、中国出身で、日本語は中国の大学で学習した。その際、文法指導や発音指導を受けたことがあるが、漢字指導というものを受けたことがない。中国での日本語教育においては、漢字教育は必要ないと思われる。なぜかというと、漢字はもともと中国の文字だから、中国人学習者にとって、日本語の漢字学習は苦勞なしにできるとされているからである。しかし、筆者は、日本に来てから、日本の漢字と中国の漢字の書き方が違うところの多いこと、自分の漢字の筆順に間違ったところが多いこと等々に気付いた。漢字指導を受けることの重要性をひしひしと感じた。今回の実践研究では、教壇実習をおこないながら、教師という立場に立って漢字指導を実施したことで、漢字教育の重要性を再確認したほか、授業の進め方、教案の作り方、教室活動の行い方などをも勉強できた。

前述のように、漢字指導Cクラスの学習者は、漢字圏出身学習者と非漢字圏出身学

習者とが混じっている。漢字圏出身学習者の中にも、漢字をほとんど使ってこなかった韓国人学習者が約半数を占めている。以下に漢字圏出身学習者と非漢字圏出身学習者の漢字学習上の問題点をまとめておく。

〔漢字圏出身学習者〕

- ① 漢字の書き順に間違いが多い。
- ② 意味が分かって読み方の分からない漢字が多い。
- ③ 難しい漢字の読み方が軽視される傾向がある。
- ④ 中国語の熟語をそのまま日本語として使うケースが多い。

〔非漢字圏出身学習者〕

- ① を書く時、細部（点等）を脱落させたり、余分に付け加えるケースが多い。
- ② 話すことはできるが漢字を使うことが苦手な学生が多数いる。
- ③ 漢字の書き方が軽視される傾向がある。

今回の実践では、「促音」と「六書」についての指導を行った。「促音」を選んだ理由は、中国系学生や韓国系学生が「促音」に弱いことによる。現代中国語のように、「促音」（＝「入声」）がなかったり、韓国語のように、「入声」は存在していても日本語とはシステムが違っているためである。学習者からは、「初めて促音にも規則があることを知った」という声があった。また、「六書」を選んだのは、非漢字系学習者が漢字の構成に弱いと思われたからである。「形声文字がよく分かるようになった」の声があり、意を強くしたが、「難しいので分からないところもあった」という声もあり、分かり易さを心がけなくてはならないと思った。

二回にわたる教壇実習を通して、教師としての実力不足を痛感するとともに、以下のことを学ぶことができた。

- ① 授業内容に合わせて、絵カードや漢字カードなどの教具を使うと効果的である。漢字の書き方を指導する時、非漢字系学習者に対しては、連想法（漢字を意味と形に分解して、各部分をそれぞれ覚え易いように図や符号などに連想させる）を使うとより効果的である。
- ② 学習者のグループ活動を終了させる時には、教師は「どうでしたか」とか「できましたか」などのチェック型質問を使って、自分の権威を強調しない。
- ③ 学習者の授業への参加意欲を大切にす。学習者へのあいづちの打ち方や視線の位置にも注意し、学習者が気持ちよく授業が受けられるように心がける。
- ④ 教案を作る時は、教材研究を十分に行わなくてはならない。また、教案は学習者の反応まで予測して作らなくてはならない。授業中に随時修正ができるようにしなければならない。
- ⑤ 発問型質問を使えば、学習者の関心を引き起こし、授業を活性化することができるが、教師が学習者の答えを予測することが難しいので、危険性も出て来

る。それを解決するためには、事前の周到な準備が必要不可欠である。

- ⑥ 教師はクラス全体に聞こえるような大きな声を出すのが基本である。クラスのサイズや雰囲気合わせた声量の工夫も大切である。
- ⑦ 学習者全体のレベルを考慮して、授業内容を決めなくてはならない。その前提条件として、学習者のレベルを正確に把握しておく必要がある。

参考文献

- 庵功 雄 (2001) 『新しい日本学入門』 スリーエーネットワーク
- 菱沼 透 (1980) 「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例」
『日本語教育』42号
- 望月八十吉 (1974) 『中国語と日本語』 光生館
- 北京外国語大学国際交流学院 (2001-2002) 『漢日語言研究文集』 北京出版社

楊魁魁：

今学期、鈴木先生の別科の授業「漢字指導C」の授業に参加し、別科の学生たちと講義を聴いたり、教壇に立って用意した教材を使って教えたりした。学期初めのアンケートによると、「漢字に興味がある」、「もっとたくさんの漢字を覚えて、日常生活に役立てたい」などの意見が多かった。また、漢字圏出身の学習者の中に、漢字の基礎ができていない学生がいることに驚かせられた。日本語の漢字には、日本語独自の体系ができていて、漢字圏出身だからといって、指導しなくてもできるというはずがなく、漢字指導の必要性を改めて認識した。

教壇実習の時、筆者は一回目に「連濁」を取り上げ、二回目には「百面相の漢字の読み方」を行った。前者においては、「清音」と「濁音」を復習し、二つの語が結合して一語を作る時、連濁の起こる場合と、起こらない場合の例を挙げ、学習者に問題意識を持たせ、連濁のルールを説明した後で、練習問題を解かせるという授業の流れを作ってみた。後者においては、主に読み方ごとの例を数多く紹介したが、単に単語を羅列しただけでは効果が薄く、論理的に納得させないと効果が学がらないことが判明した。

実を言うと、筆者は今回初めて、教案の作り方を学んだ。これまでは、授業中に話すことを大雑把に書けばいいと思っていたが、参考書を読んだり、他の人の教案を見たりすることを通じて、教師自身の手になる細かい教室設計、精緻な教室コントロールがいかに重要なのが分かった。そして、これは当たり前のことであるが、自分自身が教師になってみて、日本語教師にはいかに高い日本語能力が求められているか、よく理解できた。ひとたび教壇に立ち、学生に教える以上、誤った日本語を使い、誤った日本語を学習者に教えるはならないからである。また、教師は自分に自信が持て

るように研修を積み、学習者のニーズに合った授業が展開できるよう不断に心がけなくてはならない。今後は、こうした反省を踏まえて、実際の教学に当たりたいと思う。

参考文献

- 海保 博之 (2003)『日本語教育のための心理学』新曜社
福田 知行 (2000)『漢字と日本語教育』 南雲堂
小林 一仁 (1998)『バツをつけない漢字指導』 大修館書店

陸麗青：

2005年度春学期の「日本語教育実践研究(7)」に参加して教壇実習を行った際、考えた「学習者の興味を引き出すための工夫」という題で話をしたい。

「同音異義語」と「四字熟語」という二つの学習項目を教える時、どのように教えればいいか、最初に教案作りの段階からいろいろ考えた。すなわち、どういうふうに学習項目を導入すれば学習者の興味を引き出せるかに注目したのである。

第一回目に「同音異義語」について教えた時は、自作の絵カードを用いて導入を試みた。「雨」と「飴」、「雲」と「蜘蛛」、「辞典」と「字典」のような、日常よく見かける同音異義語をカラーの絵カードによって分かりやすく説明するように工夫してみた。まず、学習者は絵カードに興味を引かれて、面白そうに説明を聞いていた。そうした説明の単調さを避けるため、次のようなよく知られた「同音異義語」のクイズを用意してみた。

- きしゃのきしゃがきしゃできしゃした。[貴社の記者が汽車で帰社した。]
- にはにはにははとりがいる。[庭には二羽鶏がいる。]

こうした作業を行っていけば、同音異義語を覚えることに抵抗がなくなり、学習者の学習意欲が高められていくように思われた。

第二回目の実習の時は、「四字熟語」の導入を行うために、「四面楚歌」という言葉を説明した。この四字熟語は、漢字圏出身の学生にとっては馴染みの深いものである。しかし、非漢字圏出身の学習者にとっては、ことばの由来も明らかではなく、ことばに秘められた悠久の歴史とは縁の薄いものである。そうした背景を持つ四字熟語を短時間に紹介するのは決して簡単なことではない。堅苦しい単語をどのようにあつかえばよいか、大きな課題として残った。

学習項目の導入を行ない、練習問題を作成している時、学習者のレベルに合った問題を作ることがいかに大切であることを痛感した。筆者は、安易にも面白さばかりに目を向けたため、練習の量や難易度について余り考慮することはなかった。同じクラスの中においても、学習者のレベルはまちまちであり、すばやく問題が解ける学生もいれば、文化的背景の違いで、全くできない学生もいる。そのため、練習問題が解けない

学習者が授業に飽き、積極的に取り組もうとする意欲を失っているように見受けられるケースもあった。学習者に学習の楽しみを味わってもらう授業を作り上げていくためには、彼らのレベルに合わせた練習問題を作成することが最も重要な作業であり、学習者の意欲や自信を高め、達成感を獲得させることは必要不可欠なことなのである。

今回担当した授業を振り返って、反省点を挙げておく。

① 時間に対する認識の甘さ

第一回目の教壇実習では、学習項目を分かりやすく説明するのに時間を取られ、大量の練習問題を準備しておいたため、練習の答え合わせの時間が不足してしまった。実際授業を行う際は、学習内容を考えるだけでなく、どのようなペースで授業を進めていくか、時間配分に注意を払わなければならない。

② 学習者とのコミュニケーションの重要さ

第二回目の教壇実習の中で、一番気になったのは、学習者とのコミュニケーションの不足ということである。教室にダイナミズムを生み出すためには、学習者とのコミュニケーションを取ることが非常に重要なことである。今回の実習の中では、残念ながら時間の関係から、学習者個々に漢字学習の困難点を聞くことができず、学期終了時にも感想や考え等の聞き取り調査をすることができなかった。よりよい授業を展開するには、学習者からのフィードバックも必要不可欠なことである。今後の課題として、考え続けて生きたい。

(チ ョ ウ	ブ ン レ イ	・ 修 士 課 程 1 年
	チ ン	エ ン	・ 修 士 課 程 1 年
	ヨ ウ	カ イ カ イ	・ 修 士 課 程 1 年
	リ ク	レ イ セ イ	・ 修 士 課 程 2 年

参考文献：

- アルク日本語出版編集部 (1994) 『漢字ハンドブック』 アルク
 武部良明 (1988) 『漢字の教え方』 アルク
 現代言語研究会 (1998) 『四字熟語活用新字典』 あすとり出版
 岩波書店辞典編集部 (2002) 『四字熟語辞典』 岩波書店

まとめ

今回この実践研究に参加し、われわれは以下のような共通の認識が得られた。すなわち、「漢字教育は独立したものではなく、語彙教育・音声教育などの諸分野とも深い関わりを持つものである」と。そして、「漢字教育は、漢字系の学生にも非漢字系の学生にも必要不可欠なものである」と。特に、現在さほど重視されていない中国圏の日本語教育における「漢字教育」の可能性と重要性について思いを新たにした。上に述

べたように、われわれはこの授業を通じてさまざまな経験をし、多くの教訓を得た。今後は、こうしたものを糧としながら、日本語教育（及び漢字教育）の実践に当たっていきたい。